早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　11号―1　2003年9月

IsabelとEmma―二人の女性

―Henry JamesとGustave Flaubertの出会いから―

出　野　由紀子

序

Henry James前期作品の中核をなす国際テーマ小説は，従来Jamesのコスモポリタン性を中心に解釈されてきた。もちろん幼少のころよりヨーロッパで教育を受けることの多かったJamesの作品に国籍不明瞭の自己アイデンティティーが含まれていたことは否定できない。しかし，その一方で，家族との確執―特に同じ名前を持つ父，Henry James, Sr.との関係―はJames初期作品に大きな影響を与えた可能性がある。一般的にアメリカジャーナリズム，新聞[1]の研究対象とされるHenry James, Sr.のスキャンダルを*The Portrait of a Lady*の製作過程との関係性で考察することも強ち的外れではないであろう。

「Isabelはいったいどうなったのか」という問いは*The Portrait of a Lady*を読み終わった者であれば必ず感じる素朴な疑問である。たしかに彼女の行動には不可解なことが多い。3人の求婚者のうちLord Warburtonに断るときは「運命からのがれぬことはできない」と語り，Caspar Goodwoodの求婚を断る時は「自分の人生は自分で選び取りたい」と述べる。これはIsabelの数々ある矛盾の中の顕著な例にすぎない。このような言動を支える唯一の源はIsabelの己自身に対する自己愛であろう。理想的で半ば勝気とも言える理想主義者であるIsabelは激しいほど自我の自由を追い求め，自由な意志で判断し，選択し，行動し，更にそれに対し必要以上に責任を取ろうとする。しかし最終的にはヨーロッパ文明の受難者となり，因襲にうちひしがれていく。

このように考えるとIsabelの自由への渇望，過剰な理想はJamesが若かりし頃に最も敬愛していた作家Gustave Flaubertの*Madame Bovary*の主人公Emma Bovaryと類似するのではないだろうか，という問いがこの論文の出発点となる。JamesがパリでFlaubertのサロンに参加し，彼から深い感銘を受け，現実の生活を描いた小説に，小説本来の姿を見い出したことは周知の事実であるが，同時に尊敬する中にも何かJamesの意に充たぬものを*Madame Bovary*の中に感じとったのである。晩年になるとその思いは更に強くなり，Flaubert がEmma Bovaryのような女を主人公にしたこと自体を残念がるようになる。“Ah, but one paints the fierce passions of a luxurious aristocracy; the other deals with the petty miseries of a little bourgeoise in a provincial town!”[2] このように「田舎町の小さな不幸」は，国際テーマ小説の作家になりつつあったJamesにとって，興味を持ちつつも甚だ不都合な題材であったのである。

本稿においては，Henry JamesとGustave Flaubertとの出会いに焦点をあてつつ，同時代アメリカジャーナリズムを賑わせていたHenry James, Sr.のJamesに対する影響を考察し，もって*The Portrait of a Lady*製作にあたりJamesが暗黙のうちに意図していたものを解き明かすことを目的とする。このことによって，Isabelのとる行動の不可解さに少しでも接近したい。しかし，*The Portrait of a Lady*のIsabelと*Madame Bovary*のEmmaに倫理的価値判断を与え，善悪を読み取るつもりは毛頭ないことを最初に断っておくことにする。

1．JamesとFlaubert—Flaubert作品との出会い—

Jamesは小説を詩や絵画に劣らぬ芸術形式に仕上げるために，その人生のすべてをかけ，あらゆる犠牲を払ってでも人々を観察し続けた。その小説家的態度は，彼の師であり，また敬愛すべき作家でもあるGustave Flaubertに負うところが多い。着想が浮かばぬ時でも一定の時間は机にむかいひたすら文章を書くFlaubertの態度は，Jamesの膨大な作品群を支える大きな支軸でもある。

では，JamesとFlaubertとの出会いはいったいいつであったのだろうか。Henry James（1843-1916）は幼少のころより父Henry James, Sr.（1811-1882）の特殊な宗教的教育方針—精神を自由に発達させるためには特定の地域や生活の慣習の，あるいは特定の人間の知性の，影響をあまり強くうけすぎてはならぬという独特の思想—にしたがってヨーロッパへ渡り，できるだけ多くの国のできるだけ多くの人から，できるだけ多くの言語で教育を受けた。James一家がGreat Western号に乗船したのは1843年10月19日，Henry Jamesが生まれてまだ半年あまりであり，兄William Jamesは2才になるかならないかの頃のことである。(3) その後何度も渡欧を繰り返し，もっとも多感な時期をヨーロッパで過ごした経験は，生涯を通してJamesの作品に深い影響を及ぼすのである。1849年，Henry James, Sr.がEmersonへ書いた手紙には，'sensuous education'をほどこすには，こちらよりもフランスとドイツに行って数年間すごすほうがいいのではないかと思う，と記してある。こうしてJamesは国際派と呼ばれるにふさわしい教育をうけることとなるのである。人一倍鋭敏な感受性を持っていたJamesにとって，この時期にヨーロッパでうけた印象は数知れないほどであったであろう。そしてついに，1855年6月27日，James一家はAtlantic号で二度目のヨーロッパ旅行に出発した。7月8日，Liverpoolに上陸，Londonを経由してParisへと向かった。この時期JamesはLondonやParisで数人の家庭教師から教育を受け，また学校にも通い，そしてしばしば劇場にも足をのばすという生活を送っていた。

南北戦争が終わった1865年，署名入りの最初の短編集"The Story of a Year"を*Atlantic Monthly*, 3月号に発表し，その後つぎつぎと同誌および*Nation*誌に書評を載せ始めるようになるJamesであるが，4年後の1869年，「過去の印象」を追い求めるかのごとく再びヨーロッパへ向かいイギリス，フランス，イタリア，スイスを旅行する。James，20代前半の時のことである。いとこMinny Templeの訃報をうけ一時アメリカへ戻るが，1872年再びヨーロッパへと渡るのである。その後Florenceで"Roderick Hudson"の執筆を始め，再びParisに戻ってきたのが1875年である。同年の末，Turgenev

を通じてFlaubertのサロンに参加するようになるJamesであるが，Flaubertの作品と出会ったのはもっと以前のことであった。

1855年6月27日，James一家の二度目のヨーロッパ旅行は，前述の通り子供たちの‘sensuous education’のためであったというのが建前であったが，実のところJames家にはアメリカを離れたいもう一つの理由があったようだ。

1848年，Jamesの父Henry James, Sr.（1811-82）がフランスの思想家Victor Hennequin（1816-54）の著作*Les Amours au Phalanstère*（*Love in the Phalanstery*）を英訳した。その序文の中で彼は次のような文章を寄せている。“Certainly the charge of encouraging a promiscuous intercourse of the sexes, which has been falsely made against Fourier, fairly holds against our present laws.”(4) これがきっかけとなりJamesの父Henry James, Sr. は free love論争に巻き込まれることとなる。この論争がどうにか落ち着いた1855年，James家の人々はアメリカから逃れるようにヨーロッパへ渡るのである。それから3年間彼らはGeneva，London，Paris，Boulogne-sur-Merなどに滞在し，Jamesは主に家庭教師から教育を受けていた。Flaubertの作品に出会ったのはこのような時期であった。1893年3月*Macmillan's Magazine*第67号に掲載されたGustave Flaubert論の中でJamesはFlaubertの名作の一つである*Madame Bovary*との出会いを以下のように語る。

> … when a very young person in Paris he took up from the parental table the latest number of the periodical in which Flaubert's then duly unrecognized masterpiece was in course of publication. The moment is not historic, but it was to become in the light of history, as may be said, so unforgettable that every small feature of it yet again lives for him: it rests there like the backward end of the span.(5)

ヨーロッパへ出発する前Oneida Community(6) に関心を持ち，その支部を訪れたりして複合婚の可能性を調査していたため“free lover”だと思われたHerny James, Sr.の机の上に，当時風俗紊乱の罪で裁判沙汰になっていた*Madame Bovary*が収録された定期刊行物があったということは興味深い事実である。そしてJamesはそれを手に取り*Madame Bovary: Moeurs de Province*という題名そのものに大きな衝撃を覚える。その時の印象は以下のように語られる。

> The cover of the old Revue de Paris was yellow, if I mistake not, like that of the new, and *Madame Bovary: Moeurs de Province*, on the inside of it, was already, on the spot, as a title, mysteriously arresting, inscrutably charged. I was ignorant of what had preceded and was not to know till much later what followed; but present to me still is the act of standing there before the fire, my back against the low beplushed and begarnished French chimney-piece and taking in what I might of that instalment, taking it in with so surprised an interest, and perhaps as well such a stir of faint foreknowledge, that the sunny little salon, the autumn day, the window ajar and the cheerful outside

clatter of the Rue Montaigne are all now for me more or less in the story and the story more or less in them.(7)

まだ10代前半だったJamesは，*Madame Bovary: Moeurs de Province*を理解しうる限り一心に読みふけり，不意を襲われたような大きな興味にとらわれるのである。Charles Baudelaireの*Les Fleurs du Mal*と同様に*Madame Bovary*は第二帝政下の高い道徳観念に則さず公序良俗違反として糾弾されることとなった。国策に非協力であるこの種の文学は1857年風俗紊乱のかどにより裁判沙汰となるが，それが勝利におわると人々はこれらの作品をむさぼり読むようになるのである。

父Henry James, Sr.のfree lover騒動とその父の机の上にあったFlaubertの*Madame Bovary*は若き日のJamesの心の中で奇妙に結びついたにちがいない。

2．JamesとFlaubert—Gustave Flaubertとの出会い—

1875年，JamesはParisにいた。同地でTurgenevと親交を結び，彼を通じてFlaubert, Edmond de Goncourt, Zola, Daudetなどと交際を始めた。特に，若き日に感銘を受けた*Madame Bovary*の作者であるFlaubertのサロンには頻繁に足を寄せたようである。その前年である1894年，父Henry James, Sr.は大きなスキャンダルに見舞われていた。Henry James, Sr.がHarvey Y. Russellに書いた手紙がそのまま1874年4月18日付けの*Woodhull & Claflin's Weekly*に掲載されてしまったのである。手紙には以下の内容が含まれていた。

I marry my wife under the impression that she is literally perfect, and is going to exhaust my capacity of desire ever after. Ere long I discover my mistake. The world, the flesh, or the devil (or possibly all these combined) suggest a pungent sense of bondage in the marriage tie. My good habits, my good breeding, my hearty respect for my wife, my sense of what is due to her amiable devotion, prevent my everletting her suspect the conflict going on in my bosom; but there it is, nevertheless, a ceaseless conflict between law and liberty, between conscience and inclination. I know that it would be possible to make a compromise or enforce a truce between the two interests by clandestinely pursuing pleasure and openly following duty. But my heart revolts from this. I feel that the burden of my race is upon me, and I will perish under it if need be, but I will not shirk it like a snake, and let sincere men bear it unhelped by me.(8)

Henry James, Sr.は，私的な手紙がこのようなかたちで全米の読者の目にふれることになるなど思ってもいなかった。社会的に地位のあるJames家の人々にとってHenry James, Sr.の私生活がこのように公に曝されることは，大きな屈辱であったに違いない。しかしJamesはこのことについて何らコメントすることはなく，あたかも他人ごとのように振る舞い，ヨーロッパでの生活を堪能していた。その後1881年11月に*The Portrait of a Lady*が刊行され小説家としての地位を不動なものにするまでア

メリカに帰らなかったことを鑑みると，父の事件はJamesの心に深いキズを負わせたに違いない，との推測が可能であろう。

父Henry James, Sr.のスキャンダラスな記事が雑誌を賑わせていたちょうど同じ時期にJamesはここParisでFlaubertに出会う。彼の印象をJamesは以下のように語る。

> Flaubert was huge and diffident, but florid too and resonant, and my main remembrance is of a conception of courtesy in him, an accessibility to the human relation, that only wanted to be sure of the way taken or to take.(9)

JamesはFlaubertの中に対人への鋭敏さを感じとり，更なる好奇心を持って観察しようと試みるのである。もちろん相手が父の机の上にあった書物—*Madame Bovary*—の作者であるいうことは十分熟知した上ではあるが，人間的な意味でも興味を持ったのである。中でもFlaubertの「声」をJamesは生涯忘れることはなかった。

> Flaubert's own voice is clearest to me from the uneffaced sense of winter week-day afternoon when I found him by exception alone and when something led to his reading me aloud, in support of some judgment he had thrown off, a poem of Théophile Gautier's. He cited it as an example of verse intensely and distinctively French, and French in its melancholy, which neither Goethe or Heine nor Leopardi, neither Pushkin nor Tennyson nor, as he said, Byron, could at all have matched in kind.(10)

そのときのFlaubertの朗々とした声は強烈に明確に，そして響きのよい文章としてJamesの脳裏に刻みこまれる。Flaubertによって読まれた詩は，その詩人の声ではなくFlaubertの「声」として一層消されえないものになったのである。(11)

1877年の "Four Meetings" はJames初期の作品であるが，この作品の中にはJamesの「国際テーマ」小説の原型がきわめて顕著にあらわれている。ひとりの素朴で，ヨーロッパに対して途方もない幻想を抱いているNew Englandの女性教師の挫折の話である。彼女の無垢な良心は旧世界ヨーロッパの不毛な物欲の犠牲となる。この短編は「Jamesが，いかにFlaubertのsalonの影響を深刻に受け，それを危険に感じたためにLondonに転ずることによって，その深刻な影響から逃れようとしたかを推察させる，好個の証拠となる」(12) という意味においても興味深い作品である。"Four Meetings" の女主人公Caroline Spencerはヨーロッパの歴史や案内書を熟読しているだけではなく，Byronの詩を暗記しているほどである。語り手が 'Prisoner of Chillon' のBonnivard幽閉の詩を引用してみようとしてもうまくいかないが，彼女は見事にその一節を口ずさむのである。Jamesの若き時代のヨーロッパへの憧れを投影した人物としては，この物語より少し前の "Madame de Mauves"（1874年）のEuphemia，この後に考察することになるであろう，*The Portrait of a Lady*（1880年）のIsabel Archerなどが代表としてあげられる。このように彼女のヨーロッパへの憧れはきわめて激しい。"Four

Meetings" のCaroline Spencerに比べると1878年の "Daisy Miller" は幾分軽いタッチで描かれている。この軽いタッチの中篇小説（Nouvelle）"Daisy Miller" はJamesがはじめて小説家として世間的に名を得た作品である。Caroline Spencerが "I'd go crazy if I didn't sail, and yet certainly I'd go crazy if I did."(13) と言うのに対し，Daisyはヨーロッパに対して不満があるようだ。更にヨーロッパの歴史にあまり興味がない。Winterbourneが 'Prisoner of Chillon' のBonnivard幽閉の詩について語ろうとしても全く興味を示さないほどである。

Jamesの前で詩を朗読してくれた時のFlaubertの「声」は，James初期作品のなかにわずかに垣間見られるのである。

3．The Portrait of a LadyとMadame Bovary

1881年の*The Portrait of a Lady*は，1880年の春，Florenceで着手され，同年の秋10月から，イギリスの*Macmillan's Magazine*に連載され，更にひと月遅れてアメリカの*Atlantic Monthly*に，それぞれ，約一年間連載された。この作品は初期の国際テーマ小説の集大成とも言える。Isabel Archerというひとりの女性が，みずからの立つ状況を内面からとらえ，主体の自由と他者との存在との間に，「関係の感覚」を，繊細に，知的にとらえていく。つまり，Isabelに「何が起こったのか」ではなく，Isabelの意識に「どのように作用したのか」，に中心があてられているのである。Jamesは "The Art of Fiction"の中で，"What is character but the determination of incident? What is incident but the illustration of character?"(14) と述べているが，まさにこの小説もIsabelの性格が事件を引き起こしているといえるであろう。その点において*Madame Bovary*との類似がみられる。まさにEmmaの空想が事件を引き起こし，自身の堕落，破滅をもたらしているのである。

Emmaに比べるとIsabelは，理念的で，勝気な理想主義者である。そのため激しく自我の自由を追い求める。みずからの自由な意志で判断し，選択し，行動し，そしてその結果何が起ころうとも自分で責任をとろうとする。彼女は力のある哲学—特にドイツの観念論哲学—が好きだった。"Just now she had given it marching orders and it had been trudging over the sandy plains of a history of German Thought."(15) 彼女が学問の天才であるという評判もたつほどである。"For these excellent people never withheld their admiration from a reach of intellect of which they themselves were not conscious, and spoke of Isabel as a prodigy of learning, a creature reported to have read the classic authors – in translations."(16) Isabelは「頭のいい女性である」と他人から思われることが好きだった。もし彼女が本当の意味での天才であったのならtranslationsなどは読まなかったであろう。しかし周囲の人は，彼女の能力をNew Englandのtranscendentalな知的伝統に属していると考えた。その理想の高さ，自由の追求の激しさが，彼女の美点でありながら，そのまま欠点となっているのである。ではEmmaはどうであろうか。Charlesと結婚したEmmaは「至福」，「情熱」，「陶酔」を実際の人生の中に追い求め，*Poul et Virginie*を読んで温かい愛情のことをいろいろ夢想するのである。もちろんIsabel Archerの原型に，JamesのいとこMinny Templeの姿があるということは，歴代の批評家が述べると

おりである。彼女は因襲の束縛を知らぬ若いアメリカ人そのもので，このアメリカ的個性を持つ女性が，ヨーロッパ文明の美と自由に憧れながら，逆にその情熱の受難者となっていく。まさにEmmaが，みずからの過剰な夢と欲望のためにわが身を滅ぼし，恋人や肉親を災厄に巻き込んでいくのと似ているのではないだろうか。しかし，それとは対照的な「力への意志」—自分の力で自分の人生を切り開いていこうとする意志—はIsabel特有の特性として読者の目に映る。

父親の死後，Isabelが伯母に引き取られる，という設定からこの物語がはじまる。ドイツの哲学書を片手に読書にふけるIsabelはこのどん底の状況から抜けだすことのできる機会をうかがっている。Isabelは，自分のこころがふらふらし過ぎる時，心を鍛練して軍隊流の動き方を仕込み，命令次第で前進したり，停止したり，交代したり，もっと複雑な動きをするように自分自身を教え込んでいた。(17) 彼女の性格を顕著に表す以下のような文がある。

> for it seemed to her often that her mind moved more quickly than theirs, and this encouraged an impatience that might easily be confounded with superiority. It may be affirmed without delay that Isabel was probably very liable to the sin of self-esteem; she often surveyed with complacency the field of her own nature; she was in the habit of taking for granted, on scanty evidence, that she was right; she treated herself to occasions of homage. Meanwhile her errors and delusions were frequently such as a biographer interested in preserving the dignity of his subject must shrink from specifying.(18)

Isabelはtranscendentalな知的伝統を崇拝する女性でもある。

> that one should be one of the best, should be conscious of a fine organization (she couldn't help knowing her organization was fine), should move in a realm of light, of natural wisdom, of happy impulse, of inspiration gracefully chronic. It was almost as unnecessary to cultivate doubt of one's self as to cultivate doubt of one's best friend: one should try to be one's own best friend and to give one's self, in this manner, distinguished company.(19)

Isabelの世界は自分中心にまわっているため，言動が時々めちゃくちゃになる。それは2人の求婚者に断るときのセリフからわかる。まず，Lord Warburtonに断るときは "I can't escape my fate…. I should try to escape it if I were to marry you…. I can't escape unhappiness…. In marrying you I shall be trying to."(20) と言い，数日後，Caspar Goodwoodの求婚を断るときは次のような根拠から拒絶する。"I like my liberty too much.... Besides, I try to judge things for myself.... I wish to choose my fate."(21) Isabelは子供の時，オルバニーの家の通りを挟んだ斜め向かいにあった小学校を退学したことがあった。初等教育を受ける機会を与えられたにもかかわらず，規則に反抗したため，家にいてもよいことになったのであった。Isabelの人生は「自由の喜びと除け者にされた苦痛」という言葉がすべてを集約しているかのようである。Isabelは人間の内面を重視していたにもかかわらず，実際には逆の選択

ばかりしている。Lord Warburton について言えば，彼が「名士」だという評判に対して，難色を示しているようである。もし求婚を受けいれれば，自分も世間一般の肩書きを気にする人間と同様になってしまう，と懸念したようだ。Lord Warburton の "You judge only from the outside – you don't care,"[22] という言葉が，かえってアイロニカルに聞こえる。自由に生きようとすればするほどかえって人の内面を軽視する，という悲劇をまさにこの出来事は顕著にものがたっているのである。その証拠に Isabel の選択は全てが誤った方向に先導されている。彼女は彼女以外の内的世界を決して認めないのである。

Isabel と比較すると Emma は自分以外の世界をうらやんでばかりいる。舞踏会で城を訪ねれば，砂糖壺の砂糖までが自分のものよりも一層白く，一層美しく思われてくるほどである。自分の属する身分から抜け出すことを夢見るがため，それが過度の夢想や抒情を惑溺することになるのである。現実世界がもつ「凡庸」，「愚劣」，「滑稽」から逃れるために，夢想や抒情のなかに崇高な何かを見つけ出そうとする態度は "Bovarysm" という呼称を与えられたほどである。この非現実を憧憬する傾向は，現実を「凡庸」で，「愚劣」で，「滑稽」であるものとしてとらえることからはじまる。この "Bovarysm" なる用語は 1865 年作家 Barbey d'Aurevilly が作った言葉で，1892 年に哲学者 Jules de Gautier が論文の主題にした。若い女が，感情的・社会的欲求不満を解消しようとして，自己を現実の自己以上のものに過大に，小説のように夢想して逃避する傾向をいう。Isabel も Emma も確かに自己を現実の自己以上に過大に評価するが，「他者依存」の観点からみると二人には大きな差異がある。つまり Isabel は自分自身の内的世界を信じ，大きな理想と理念を掲げ，自らが主体的に行動しうるために，数々の失敗を重ねていくのに対し，Emma は他者に依存しすぎるが故の破滅なのである。James は Emma について以下のように語る。

> Our complaint is that Emma Bovary, in spite of the nature of her consciousness and in spite of her reflecting so much that of her creator, is really too small an affair.[23]

Flaubert を敬愛しつつも「あまりにも小さな人間」である Emma に対しての James のコメントは手厳しい。更に続けて James は Emma を批判する。

> The general scale and size of Emma, who is small even of her sort, should be a warning to hyperbole.[24]

Emma の人間的なスケールの小ささは，この種の人間としても小さすぎて無知で愚かしい。しかし終局的には泥の中をのたうち回りながらもロマンチックな幻想にひたりつづけている，ということがこの作品を勝利へと導く由縁である，と James は考えるのである。では，Isabel はどうであろうか。彼の愛する女性主人公 Isabel には Emma と同じような道を歩ませたくなかったはずである。Emma が持ち合わせる憧憬，負債，姦通は James のもっとも苦手とするものである。James はスキャンダルに塗れた父の汚名を晴らしつつ，自分の名声を高めるために，もっと崇高で New England の transcendental な知的伝統に属していると周囲から思われ，己の自由を追求するがために破滅する女

性を描かなければならなかった。

4．結語として

Henry James, Sr.のスキャンダルが雑誌に掲載されるのが1874年4月18日，Jamesが2年ぶりにアメリカに帰ってくるのが同年10月であることを考えると，Jamesが父の事件を知らなかったはずがない。翌年の1875年10月，Jamesはアメリカには小説の素材となる歴史，伝統，文化がないという理由でヨーロッパ永住の意を固めてParisへと出発する。そしてその地で幼いころ父の机の上にあった本—*Madame Bovary: Moeurs de Province*—の作者Gustave Flaubertと出会うのである。Jamesにとって*Madame Bovary*の作者は思ったとおり素晴らしい人物であった。1876年5月28日付けのW. D. Howellsへの手紙には，Flaubertに最も興味を惹かれると述べ，また最も有力な芸術家であると語っていながらも，同年12月にはParis知識人に反発を感じLondonへと移っているのである。続く翌年の1877年には*The American*，1878年には "Daisy Miller"，*The Europeans*，1879年には "International Episode" と次々に国際テーマ小説を書き続けるのである。1876年Londonへ移ったJamesは1877年Grace Nortonへ次のような手紙を書く。

> so many absent things here, where the dustky misery and the famous "hypocrisy" which foreign writers descant so much upon, seem sometimes to usurp the whole field of vision.(25)

一般の社会集団から抜け出たことのない人たちは地方根性がなかなか抜けず，偽善で凝り固まってしまう，とJamesは考えた。そして自分のことを以下のように語るのである。

> To tell the truth, I find myself a good deal more of a cosmopolitan (thanks to that combination of the continent and the U.S.A. which has formed my lot) than the average Briton of culture; and to be — to have become by force of circumstances — a cosmopolitan is of necessity to be a good deal alone.(26)

コスモポリタンであることをあたかも持って生まれた特性のように語るが，そこにはアメリカへ帰りたくない本当の理由を隠蔽する意味も含まれていたにちがいない。ミクロコスモスの中で生きるちっぽけな人間—Emma—に類似させつつも，スケールの大きい女性を書くことは，Jamesにとって2つの意味合いを持っていた。一つはコスモポリタン作家のスケールの大きさをフランス作家に見せつけること，そしてもう一つは父の汚名とは関係のない自分をアメリカ人にわからせることであったのではないだろうか。だからこそ*The Portrait of a Lady*のIsabelは読み手の心を擽る女性として印象深いのである。

註(1) アメリカ新聞歴史については，以下を参考にした。
George Henry Payne, *History of Journalism in the United States*, (D. Appleton and Company, 1920)

Frank Luther Mott, *American Journalism: History 1690-1960,*（Macmillan Press, 1962）
THE POST's NEW YORK,（*the New York Post*, 2001）

(2) Edmund Wilson, *The Triple Thinkers,*（Oxford University Press, 1963）, p. 104

(3) Thomas Carlyle に会うため Ralph Waldo Emerson に依頼し，紹介状を書いてもらった。

(4) Henry James, Sr., *Love in Phalanstery,*（Dewitt and Davenport, 1849）, pp. v-vii

(5) Henry James, *The House of Fiction,*（Rupert Hart-Davis, 1957）, p. 196

(6) Oneida Community とは，宗教家 John Hummghery Noyer（1811-86）が，1848年，ニューヨーク州オナイダに建設した生活共同体のことで，300人以上の信者が集まって，相互批判などを要した質的な生活を行った。Fourierism の影響を受けて建設されたともいわれているこの共同体の制度や生産物は高い評価を受けた。しかし，性行為は神との一体化のためにあるという宗教的信条に基づいた complex marriage という結婚制度は，実際には健康で信仰心が厚い男女を厳選し，長老が夫婦の組み合わせを決めることによってコミュニティーの管理下で行われたが，一夫多妻制や free love に近いものと思われたため，世間からは不道徳だという批判を浴びた。

(7) *Ibid.*, p. 196-197

(8) Henry James, Sr., "*Morality vs. Brute Instinct: Marriage vs. Free Love,*" Woodhull & Claflin's Weekly, April 18, 1874, p. 5

(9) Henry James, *The House of Fiction,*（Rupert Hart-Davis, 1957）, p. 192

(10) *Ibid.*, pp. 193

(11) *Ibid.*

(12) 中村真一郎『小説家ヘンリー・ジェイムズ』（集英社，1991）p. 66

(13) Henry James, *Selected Tales,*（Penguin Classics, 2001）, p. 4

(14) Henry James, "*The Art of Fiction*",（A Norton Critical Edition, 1984）, p. 354

(15) Henry James, *The Portrait of a Lady,*（A Norton Critical Edition, 1995）, p. 34

(16) *Ibid.*, p. 53

(17) *Ibid.*, pp. 33-34

(18) *Ibid.*, p. 53

(19) *Ibid.*, pp. 53-54

(20) *Ibid.*

(21) *Ibid.*

(22) *Ibid.*, p. 77

(23) Henry James, *The House of Fiction,*（Rupert Hart-Davis, 1957）, p. 199

(24) *Ibid.*

(25) Henry James, *The Letter of Henry James,*（Charles Scribner's sons, 1920）, p. 56

(26) *Ibid.*, p. 55